小早川警視正シリーズ⑥

五稜郭殺人旅情

ごりょうかく

長編本格推理小説

斎藤栄

NON NOVEL

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL－322

長編本格推理小説　五稜郭殺人旅情

平成2年6月20日　初版第1刷発行

著者　斎藤栄

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社
〒101　東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081 (営業)
☎ 03 (265) 2080 (編集)

印刷　萩原印刷

製本　豊文社

万一，落丁・乱丁がありました場合は，おとりかえします。Printed in Japan.

ISBN4-396-20322-5　C0293

© Sakae Saito, 1990

長編本格推理小説
小早川警視正シリーズ⑥

斎藤五稜郭殺人旅情

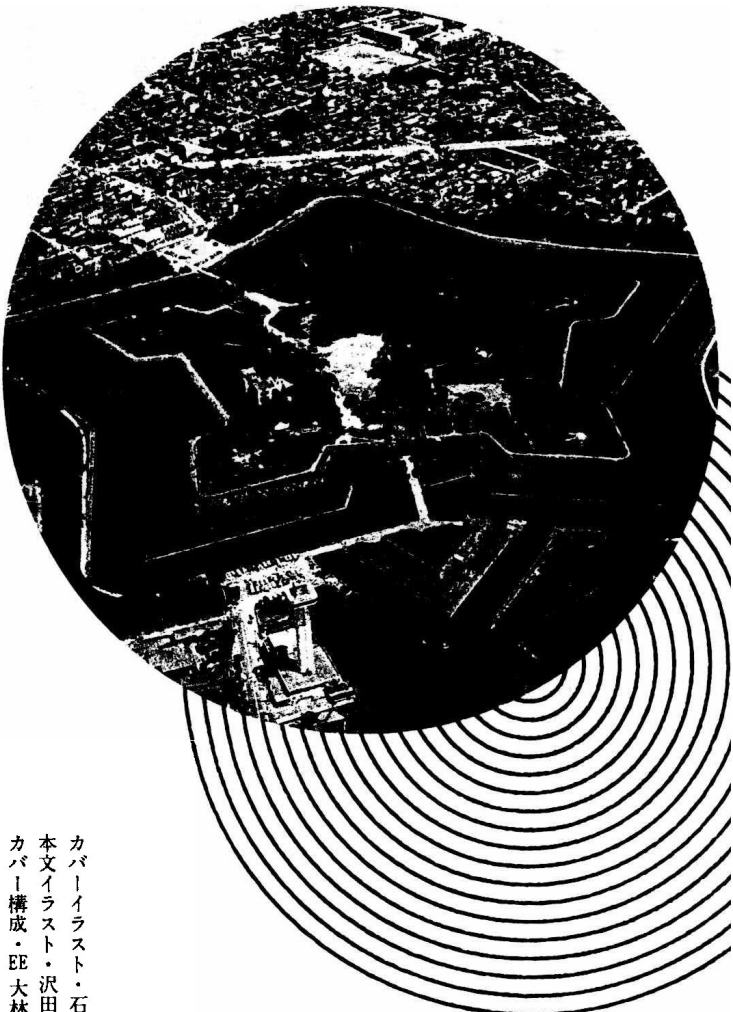
苏州工业学院图书馆
藏书章

祥伝社

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

一章　秘密のパール……7
二章　謎の言葉……33
三章　幻の五稜郭……59
四章　ペンション千里……84
五章　射殺……111
六章　大鳥二三男……137
七章　死者の告発……163
八章　爆死……190



カバーイラスト・石川　俊
本文イラスト・沢田　梓
カバー構成・EE 大林真理子

〈主な登場人物〉

夏木梨香……〈ベル旅行社〉企画主任。

夏木香奈……旅行評論家。梨香の姉。

小早川警視正……警察庁BG班キャップ。香奈の夫。

若千鳥警部……警察庁BG班捜査員。

尾之木十吾……国際刑事警察機構調査官。小早川の親友。

尾之木澄江……十吾の妻。

大鳥二三男……〈大百商事〉川崎支店長。

大鳥一二郎……画家。二三男の兄。

野本るり……〈大百商事〉のOL。

野本千里……〈ペンション千里〉の経営者。るりの姉。

古河　隆……雑誌〈旅の日記〉編集長。

一章　秘密のパール

1

夏木梨香が、津波陽子と、羽田空港を飛び立って、函館に向かったのは、八月一日の午前七時二十分だった。

全日空八五一便は、約一時間で目的の函館空港に着く。

〈ベル旅行社〉の女性企画主任として活躍する梨香は、今日、新人の陽子を伴って、函館視察の一泊二日という忙しい旅に発ったのである。

それでも、短大卒で今年入社したばかりの陽子は、とても喜んでいた。

「主任と一緒なら、私、とても気が軽いわ」

などと、どこかへ行楽で出かけるみたいに、はしゃいでいた。

機内に坐ったとき、梨香は、

「このお仕事はね、こうやって座席に着いたときも、ボンヤリしていてはいけないのよ。今度の視察で、道南周遊プランの新しいメドがついた場合に、この飛行機を使うかどうか分からないけど、飛行機の混み具合とか、全体の感じというものを、あなたなりに把握しておくのよ」

と、釘をさした。

「はい。分かっています」

根が明るくて、甘ったれのところがある陽子は、丸顔の口を少し尖らせて、おどけた表情をつくった。

機は、順調に飛び、快晴の函館空港に、定刻通り

着陸した。
空港のタクシー乗り場から、二人は車に乗り込んだ。
「五稜郭に近い、亀田邸旅館へお願いしますわ」
と、梨香が、運転手に言った。
「はい」
返事のいい運転手だった。
〈亀田邸旅館〉とは、妙な旅館名だが、これは、亀田川沿いにあった土地の豪族、亀田氏の別邸を改築して旅館としたためである。
すでにメインの邸は古びているが、この邸の宏大な庭に、コテージ風の建物を宿泊客用として建てたところ、それが評判になったのだ。
梨香としては、道南周遊の基点として、この〈亀田邸旅館〉を位置づけ、そのプランを作ってみたいと思っていた。近くには、旧幕府海軍副総裁榎本武揚が、慶応四年十二月に、〈蝦夷地政権〉をつくった有名な五稜郭もある。
観光の目玉として、この五稜郭はどうしても外せないと思っていた。

2

北海道とはいえ、夏の暑さは厳しいが、それは日当たりのいい場所であり、日陰に入ると、かなり違った。
〈亀田邸旅館〉に着くと、すぐに、梨香は、経営者の木木好助に会い、
「この女は、うちに入った新人です。よろしく」
と、陽子を紹介し、ひとわたり、旅館内の説明をしてほしいと頼んだ。
梨香は、二年前に、ここへ来ていて、あらかたのことは知っている。しかし、昨年、古くなった離れの方に手を入れたというし、庭も作り変えたということを、電話で聞いていた。
「ま、どうぞ……。サンダルを履いて、庭の方

へ……」
木木好助は、愛想よく、梨香たちを案内してくれた。
〈確かに変わったわ……〉
と、庭に出たとき、梨香は思った。
平凡な日本式庭園だったところに、大きな池がつくられ、大小の奇岩を配し、丁度、巨大な盆栽にも似た光景が現出していた。
「これ……お分かりになりますか?」
と、木木が言った。
「ええ、分かりますわ。松島の風景をなぞったものでしょう? 九州の柳川にもありますわ」
と、梨香はすぐに応えた。
「いやあ……さすがによくご存じですね。それを私も意識して、造園したんですよ。日本人は、どうしても、水のある風景を好むものだから……」
木木は相好を崩して笑った。
それから、更に、それぞれが別棟になっている離れの方へ三人で歩いた。
離れは、松の木で一軒一軒、離れて造られているが、頑丈な木の枠をつけた雁木のような通路部分がある。
雪の降る冬場には、ここへ蓋をすることによって、人の通行を確保するらしい。
「今晩、お泊まりいただくのは、ここなんですよ」
と言って、木木は、八畳に四畳半の控えの間のついた離れを開けた。
全体に解放的な造りである。しかし、それでは不用心なので、入口の戸は、内側からラッチが掛けられるようになっている。この離れは戦前からあるものを改良したのだが、ドアの板戸には、松前藩のお抱え絵師と言われる井上玄美の筆になると言われる絵が、描かれているため、やたらと加工しないのだ。
「この前は、この隣りの建物でしたわ。ここも素敵ですわ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

と、梨香は、室内をぐるっと見廻して言った。
井上玄美の絵は、熊と女を描いたもので、今日的に言えば、〈美女と野獣〉という絵柄になるだろう。
陽子は、もの珍しそうに、この古びた旅館の、どこかに気品のあるムードを見廻していた。
木木と梨香らの三人が〈亀田邸旅館〉の本館へ戻って来たとき、玄関から、女ばかりのグループが入って来た。
そのうちの二人は、どこかのOLという感じだったが、残りの一人は、色が浅黒くて、躰つきがいかめしく、背も高かった。
これはOLというより、女性登山家かと、見まがうほどだった。
人相も、顎が角張り、煙草をくわえているという仕草からしても、まるきり男っぽかった。
梨香とすれ違いざま、煙草の煙をフッと吐きかけるという無遠慮なことをした。
〈嫌な人……〉
と、梨香は思った。
彼女にしてみると、個人的な好悪の問題ではなくて、観光客を案内して来たとき、こうしたタイプの女性がいると、評判を落とすので、それが一番心配だった。
梨香がじっとその後ろ姿を見送っていると、木木が、
「ご存じの方で？」
と訊いた。
「いいえ、別に……。あの三人の女もお泊まり？」
「はい。みなさんのお泊まりになる、丁度、お隣りのお部屋ですよ」
と、木木は教えてくれた。
梨香には、印象的な女だった。
「私たち……これから、五稜郭へ行ってきます。そのあと、函館の町の方へ行って、ひと廻りしたら、ここへ戻ってきますから……」

と、梨香は言った。
「どうぞどうぞ。……そうすると、お帰りは午後……」
「六時頃になるかもしれませんわ」
と、梨香は言った。
こうして、梨香は、陽子を連れて、五稜郭タワーに昇った。
このタワーに昇ると、オランダ式の五角の星形もよく分かるし、幅三十メートルの外堀が手にとるようである。
観光プランとしては、このタワーに昇り、それから館内にある市立函館博物館分館で、箱館戦争のパノラマを眺めるのが、一つのコースになっている。
あと、この公園の近くには北洋資料館もあるが、ここは立ち寄るプランはなかった。その代わり、湯ノ川温泉の市営熱帯植物園とトラピスチヌ修道院を見て、函館山へ登ることにする。
なんといっても、道南観光で、欠かせないのが函館山からの展望なのだ。
梨香としては、新人の陽子に、夜ともなれば、百万ドルの夜景と言われるこの山からの眺望を見せておきたかったのである。

3

〈亀田邸旅館〉の夕食は、頼めば、離れの各部屋にもルームサービスをしてくれるが、梨香は、
「私たちは、お仕事ですから、みなさんとご一緒の大広間での宴会席にしてください。そのほうがよろしいんです」
と、申し出た。
そうでないと、木木は、〈ベル旅行社〉というお得意さまのために、個室のサービスをするに決まっていた。
この大広間というのは、かつて亀田家で、松前の藩主を接待したことがあるというくらいの立派なも

ので、それを内装をよくして客に提供しているものだ。
しとみのような衝立で、部屋ごと、団体ごとの区切りはするが、さながら大広間での大宴会のようになる。
梨香と陽子は、浴衣には着替えなかった。梨香は薄いピンクの、襟を開けたベルト付ワンピースで、模造パールのネックレスをかけていた。これに対して、陽子は、いかにも若者らしく、Tシャツにジーパンで、カメラを手にしていたのは、〈私はお仕事中です〉という表現にほかならなかった。
料理の中心は、サケの上にイクラおろしをまぶした石狩とうばんと、イカソーメンという、いわゆる郷土料理なのが、梨香には嬉しかった。
焼魚は、未だ音を立てて脂が焼けているようなのを、どんどん持って来てくれる。
梨香と陽子の二人は、大広間の端の方の席にいたが、そこは全体がよく見渡せた。
陽子がカメラを構えて、食事風景をレンズに収めていると、そのそばを通りかかった夫婦連れらしい年輩の人物が、フト、足を止めて梨香を見た。
「おお、あなたは……夏木さんじゃありませんか？」
と、呼びかけてきた。
梨香はハッとして、男を見たが、記憶が辿れなかった。
〈どこかでお会いしたこと、ありそうだけど……〉
と、思った。
男は、年恰好は、姉の夫、小早川警視正くらいで、背も高い。
しかし、目付きは、どちらかと言えば優しく光っている。
連れの女は、おそらくこの男の夫人ということだろうが、小柄できちんとスーツを着ているのは、汗かきではないからか。
「あの……どちらさまでしたかしら……。ちょっ

と……」
〈思い出せませんけど……〉
と、言うのを口の中に納めた。
「あ。やはり、夏木さんですね。夏木梨香さん……〈ベル旅行社〉にお勤めの……」
そこまで言われれば、この男の記憶力の確かさを認めるしかない。
「はい」
「私は、尾之木十吾ですよ。いつだったか、小早川さんのお宅で、一度だけ、ご紹介されたことがあるでしょう。国際刑事警察機構の調査官をしている……」
そう言われて、梨香も思い出した。小早川のマンションで、一回、会ったこの男は、まぎれもない、小早川の友人なのである。
それにしても、なんと記憶力のいいことか。これも職業柄というべきか。
「あ、どうも。失礼いたしました。本当に……私……もの憶えがよくなくて……」
と、梨香は謙遜した。
「そんなこと、ありませんよ。これは家内の澄江です」
と、彼は言った。
つき従っていた品のいい女性が、静かに頭を下げた。
「ご旅行ですか?」
と、梨香が訊いた。
「そうです。あなた方はお仕事?」
尾之木調査官は、陽子の方も見た。
「ええ。道南の新しい観光プランを作ろうと思いまして」
「それは大変ですね」
「お席はどちらでしょう?」
と、梨香が訊いた。
「この辺じゃないかな。……あ、ここだ、丁度、隣りです」

と、尾之木が言った。
「奇遇ですわ」
「小早川さんは、お忙しいんでしょうな」
と、彼は言った。
「そうらしいです。尾之木さんは、日本にお帰りなんですか？」
確か、彼はパリに派遣されているはずだった。
「今、休暇をとって、帰国中なんです。だからこうして、二人で気儘に旅に出ていましてね」
「羨ましいお話ですわ」
「夏木さん。よろしかったら、この衝立を動かして、四人でお喋りでもしませんか？」
と、尾之木が言った。
「かまいませんけど……」
こうして、座は俄かに、賑やかになった。陽子が梨香の言うなりなのは、言うまでもない。
尾之木は、いわゆる勧め上手で、梨香は珍しく、この夜はアルコールをかなり飲んだ。

4

一時間ほど、梨香たちと一緒に夕食を付き合っていた尾之木夫妻は、
「ちょっと、お先に……」
と、引き揚げて行った。
妻の澄江が、
「なんだか……気分が悪くて……。お酒を飲みすぎたみたい……」
と、言い出したからである。
尾之木夫妻がいなくなってから、それでも三十分くらいは、梨香も陽子もその席にいたが、今度は梨香がおかしくなってきた。
「お酒が合わないってこと、あるのかしら……。これはきっと、この辺りの地酒よ」
と、梨香は言っているうちに、吐き気がしてきたので、陽子に、

「すぐに戻るわ」
と言い、トイレに立った。
その足許がフラッとした。目まいがするくらいだった。
〈こんなことでは、陽子さんに笑われてしまうわ〉
と思った。
気分の悪いときは、嘔吐してしまえば楽になることを、梨香は知っていた。旅行社の社員となって、かなり経つ。それまでの経験で、こんなときは、咽喉へ手を突っ込んで、軽く刺激し、胃の中の食べたものやアルコールを出してしまうのだ。もともと、入社間もなくに、先輩の女性に教わった手段である。
「昔、ギリシャのグルメなエピキュリアンは、みんなこうしていたのよ。少しも恥ずかしいことじゃなくて、これが食べることを楽しみにしていた人たちの知恵よ」
と、その先輩は言った。
つまり、真のエピキュリアン——快楽主義者というのは、食べ物を、咽喉のところを通せばいいので、胃から腸へ運ぶのは、下の下と考えていたというのである。
だから、食べるそばから吐いたという。宴会の隣室に、大きなボールが用意してあって、随時、そこで吐いてきては、また食べたという。
こんな話を聞かされながら、梨香は、先輩に教育されていた。だから、陽子にも、あとで説明するつもりだった。
だから、自分では、しっかりしていると思い、トイレへ行って、予定の行動をすませた。そして、また、大広間へ戻ろうとした。すると、そこには、陽子が来ていて、
「どうですか？　大丈夫ですか？」
と訊く。
「大丈夫よ。このくらいのお酒で倒れたら、旅行社の社員としては勤まるものですか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton